古田史学の会・東海　　平成29年

東 海 の 古 代

第203号　2017年7月

会長　：　竹内　強　　副会長・発行　：　林　伸禧
編集　：　石田敬一　　投稿先アドレス：　furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
ＨＰ　：　http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

天孫・皇孫降臨と邪馬壹國（２）

一宮市　竹嶌正雄

６．天孫・皇孫降臨神話を考える

（１）　葦原中国（あしはらのなかつくに）

『記』では、天照大御神が、子の正勝吾勝勝速日天忍穂耳命（まさかあかつかつはやひ）に葦原中国を治めさせようと思い天降りさせた。ところが、葦原中国は大層騒がしかった。高御産巣日神が天照大御神の命令として、天安原の八百万神に、葦原中国を平定する神の派遣を命じた。『紀』では、高皇産霊尊が、孫の瓊瓊杵尊を葦原中国の主にしようしたが、妖しく光る神や邪神が多くいた。高皇産霊尊は八十諸神を集めて、葦原中国を平定する神を協議した。

この葦原中国を『記』の記事にて考察する。

葦原中国の平定に天津国玉神の子・天若日子が派遣されたが、天若日子は大国主神の女・下照比売を娶って、葦原中国を自分のものにしようと考えた。この下照比売とは、大国主神が出雲より倭国に上り来て、胸形の奥津宮神・多紀理毗売命を娶り生まれた子である。兄に阿遅鉏高日子根神がいる。つまり、下照比売の居た所は倭国の胸形の地であり、現宗像大社のある宗像市の辺りである。

従って、葦原中国は倭国である北部九州となる。『後漢書』倭伝に「凡百余国あり」とあり、『魏志』倭人伝にも「旧百余国あり」となっており、北部九州には小さな国が沢山あったことを伝えている。

（２）　天津国（あまつくに）と天国（あまつくに）

葦原中国に８年留まった天若日子は高木神（別名高御産巣日神）の放った矢に当たり死んだ。子の死を知った父・天津国玉神がその妻子を連れて降り来って喪屋を作った。『紀』では、屍を天国に挙げて、喪屋を造ったとある。その喪屋へ下照比売の兄・阿遅志貴高日子根が弔問に来た。この時、父と妻子は、兄が天若日子と瓜二つであるので、天若日子は死んでないと思った。

この事から、阿遅志貴高日子根と天若日子は、母親が姉妹の従兄弟ではないかと考えた。つまり、天若日子の母親は宗像の三女神の次女の市寸島比売命（別名狭依毗売命）と考える。

この市寸島比売命が天津国玉神に嫁いだのであり、天津国は宗像からそれ程遠くない所と思われる。そこは玄海灘を挟んだ宗像の対岸の対馬であると考える。天津国は『紀』では天国で、高天原の具現地であり、対馬には天日神命（あめのひみたま）（天照大神）を祀る阿麻氐留神社や月読神社がある。また、『紀』神代上・第八段一書第四に高天原を追放された素戔嗚尊は、息子の五十猛神を連れ、先ず新羅国、即ち半島に行き、次に出雲国へ移っている。因って、

高天原は半島に近い対馬として問題ないと考える。この天津国の住人は海洋族の人で、同じ海洋族の東鯷国と繋がっていた。それは、天照大神の子・天忍穂耳尊の名から推測される。つまり、尊称である「耳・ミミ」は東鯷国の一つの投馬国の官の名であることから推測するのである。

（3） 天孫・皇孫の降臨

ⅰ．天孫降臨

『記』では、天照大御神の子・天忍穂耳命が高木神の女・万幡豊秋津師比売命を娶り生まれた子である邇邇芸命を豊葦原水穂国へ天降らしている。つまり、天照大御神の孫の降臨であるので天孫降臨である。この天降りした所が「竺紫の日向の高千穂の霊じふる峰」であり、「韓国に向ひ笠紗の御前にま来通り、朝日の直刺す国、夕日の日照る国」であった。

この場所を探してみる。

① 竺紫の日向

竺紫は筑紫とも書かれ、「ツクシ」と読まれている。その理由は筑後国風土記の三つの話にある。そして、『記』においては神話の時代まで遡り、島生み神話で九州島を「筑紫の島」と称している。また、「筑前国」の初見が『続日本紀』の文武二(698)年の条であるので、「筑紫国」が７世紀末まであったことになる。しかし、筑紫の文字が使われたのは大化二(646)年ころからである。

それ以前に使われた文字は分からないが、呼び方は分かる。それはチクシである。『隋書』倭国伝の大業四(608)年の条に「竹斯国」が見られ、この読みはチクシ国であり、ツクシ国でない。それは同じ条に「都斯麻国」があり、ツシマ国である。つまり、ツクシ国なら「都久斯国」と記載されるはずである。更に、「竺」の音はチクであり、「竹斯」を受けて使われた文字である。因って、竺紫のもとの読みはチクシであり、福岡県中西部のことである。

そこで、福岡県内の日向を探すと、福岡市西区と糸島市との間に日向峠が見つかる。ここが「竺紫の日向」である。

② 高千穂の霊じふる峰

ここの「高千穂」は「霊じふる峰」の美称である。問題は「クジフル」であり、クジとフルから成っている。クジはクシであり、古代日本語で〔越える〕を意味する。同じく、フルは〔丘〕である。因って、クジフルとは〔越える丘〕であり、日向峠の事を示している。

③ 笠紗の御前

日向峠に天降りした邇邇芸命は、糸島市側に降りた。それは、ここが韓国に向かっている「笠紗の御前」へ一直線の所であると言い、朝日が射し、夕日が照る所と言っている。つまり、日向峠の西側であることを示しているからである。因って、「笠紗の御前」は糸島半島である。この笠紗の御前で邇邇芸命は木花佐久夜毗売を娶ったとあるが、実際は日向峠の麓の伊都国で娶ったと考える。

ⅱ．皇孫降臨

天照大神の子・忍穂耳尊は、高皇産霊尊の女・栲幡千千姫を娶って、瓊瓊杵尊が生まれた。高皇産霊尊は、孫の瓊瓊杵尊を寵愛し、葦原中国の主とする事を望み、降ろした。『紀』では、降ろしたのが高皇産霊尊であるので、皇孫降臨となった。その天降った所は「日向の襲の高千穂峰」であり、新編日本古典文学全集『日本書紀①』（小学館、1994年）の頭注によると、ここから歩行軍で荒れた不毛の土地を通り、「一重ねの丘」から「良い国」を探し求めて、「吾田の長屋の笠狭の碕」に到ったとある。そして後年、死去して「筑紫の日向の可愛の山陵」に葬られた。

① 日向の襲の高千穂峰

『紀』では、「竺紫」が消え「日向の襲」となっている。因って、日向は九州島南部の宮崎・鹿児島の両県の事とされているが、この地に「日向」の文字が与えられたのは７世紀中期以降、律令制の成立に伴って「日向国」

とされた時である。つまり、九州王朝のある北部九州より目を遠ざける為に「竺紫」の文字を消し、「襲」を足して、無理矢理、南部九州に場所を変えた。

また、景行紀十七年三月の条に「**是の国は、直(ただ)に日出づる方に向けり**」として国の名を「日向(ヒムカ)」としたとあるが、『魏志』倭人伝に紹介されている南部九州の国は、投馬国と侏儒国の二つで、邪馬壹国以前には日向国はなかった。つまり、皇孫降臨当時、九州南部には「日向」と呼ぶ場所はなかった。従って、「日向」の地は『記』に従うべきである。

② 吾田の長屋の笠狭の碕

皇孫降臨の場所を無理矢理に南部九州にしたと前述したが、それは降臨した「日向の襲」から「笠狭の碕」及び「良い国」までの不自然さでも分かる。瓊瓊杵尊は、高千穂峰を下り、徒歩で膂宍(そしし)の空国(からくに)から丘続きに良い国を求めて、笠狭の碕に到り、そこから戻り内陸に良い国を得ている。岬は海に突き出た狭い場所であり、良い国を求めて陸側から行く所ではない。更に、先に海から岬に着いているのなら、岬から内陸の良い国への道順で良いが、取って返しての道順であり不自然である。

『記』の笠紗の御前は、邇邇芸命が高千穂峰から下りた所から望んだ所であり到達した所でない。また、「吾田の長屋」は加世田付近とされ、「笠狭の碕」は野間岬とされるが、ここも『記』に従い糸島半島とする。

③ 筑紫の日向の可愛の山陵

瓊瓊杵尊は、祖父高皇産霊尊の寵愛を受け養育され、高千穂峰に降り立ち、木花之開耶姫を娶り彦火火出見尊を儲け、「筑紫の日向の可愛の山陵」に葬られた。『紀』では降臨の地を南部九州とする為に「竺紫」の文字を消したが、埋葬の地には「筑紫」の文字を付けた。そして、この「筑紫」は九州島の事を示すとされ、「日向の可愛の山陵」は薩摩川内市宮内町、又は延岡市の可愛岳にあるとされている。しかし、前項①で検証したように南部九州には「日向」の地はない。因って、「筑紫」は北部九州で、「日向」は福岡市西区の日向川流域である。また、「可愛」は川合で日向川と室見川の合流地点にある扇状地と考える。ここには弥生前期末から弥生後期までの吉武遺跡群があり、「筑紫の日向の可愛の山陵」はこの遺跡群内の墓の何れかと考えられる。

7．天孫・皇孫降臨と邪馬壹国

（1） 高木神

高木神は、高御産巣日神の別名である。即ち、『紀』の高皇産霊尊の別名でもある。この高木神が高御産巣日神の時、天照大御神の命令で天安河の河原に八百万神を集めている。つまり、高御産巣日神は天津国で天照大御神に仕えていた。

そして、建御雷男神が葦原中国を平定した後、高御産巣日神は室見川流域に入った。この地は〔沢又は谷川〕を意味する〔奴ナイ〕国であり、稲作が容易な土地であった。この地を選んだのは室見川河口に漁業従事国の「不弥国」が関与していると考える。『魏志』倭人伝は国力を表すのに天津国内の壱岐島にある一大国と不弥国だけに「家」を使っており、二つの国が同じ海人族の国である事を伝えている。つまり、高御産巣日神の同族である海人国・不弥国が室見川流域入口にあったからである。

高御産巣日神は、天津国の対馬島から笠狭の碕の糸島半島に到り、半島東側沿いに航行し不弥国に着き、室見川流域に進んだ。この室見川流域に日向川が作った扇状地があり、そこに吉武遺跡群があり、その初期の遺跡に吉武高木遺跡がある。この遺跡から弥生前期末～中期初の金海式甕棺墓・木棺墓が出土している。つまり、紀元前２世紀末に天津国のナンバー２の高御産巣日神が奴国に入り、高木神になった。

（2） 天忍穂耳尊

天照大神は子の正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊(まさかあかつかつはやひあまおしほみみ)に葦原中国を治めるよう命じたが、天国の後継者である天忍穂耳尊は本国を離れられな

い。そこで、子の瓊瓊杵尊に葦原中国を治めさせることにした。天忍穂耳尊は、経津主神・武甕槌神らが葦原中国を平定している間に高皇産霊尊の女・栲幡千千姫を娶った。そして、瓊瓊杵尊が生まれた。瓊瓊杵尊は母・栲幡千千姫に連れられて、祖父高皇産霊尊と共に奴国に入った。『紀』に「**皇祖高皇産霊尊、特に憐愛を鍾めて崇養したまふ**」とある。

瓊瓊杵尊は、祖父高皇産霊尊に寵愛され、奴国で育てられ、父・天忍穂耳尊の希望により葦原中国を治めることになった。当時、倭国の中心は伊都国であったので、瓊瓊杵尊は日向峠を越え、霊じふる峰の西側の麓の伊都国に降り立った。

（3） 木花佐久夜毗売・木花之開耶姫

伊都国に到った瓊瓊杵尊は、その地を「朝日が射し、夕日が照る良い所である」と褒め称えた。伊都国には大山祇神の女が二人居た。姉の磐長姫と妹の木花之開耶姫である。瓊瓊杵尊は木花之開耶姫を娶り、彦火火出見尊（『記』：火遠理命）が生まれた。『記』で言う山幸彦である。また、瓊瓊杵尊、又は別の海人族の者が友好関係にある東鯷国へ行き、そこの長の女・神吾田津姫を娶り、隼人等の始祖・火闌降命（『記』：火照命）が生まれた。『記』で言う海幸彦である。

（4） 海幸彦と山幸彦

海幸彦と山幸彦との争いに海水の干満に関する神話がある。それは、潮満瓊と潮涸瓊（『記』：塩盈珠と塩乾珠）により、山幸彦が海幸彦を懲らしめる話である。この話は有明海北部及び筑後川河口域での大きな干満を表現したものである。海幸彦は東鯷人であるが、この話から筑後川河口域にも進出していたと考えられ、この東鯷人と倭国人との争いを表していると推測する。

（5） 天孫（皇孫）降臨から邪馬壹国へ（まとめに代えて）

稲作が盛んになった弥生前期中頃に、北部九州は百余国の小さな国に分かれていた。同じ頃、出雲地方は出雲国を中心に纏まった勢力があり、北九州地区まで影響を与えていた。それが大国主神と多紀理毗売命の婚姻である。弥生前期末のBC108年に前漢の武帝が朝鮮を平定し楽浪・臨屯・真番・玄兎の四郡を置いたのを期に半島から倭国への人の移動が増えた。これに伴い対馬、壱岐を中心とした天津国からも九州島への進出があった。この時期に北部九州の百余国は三十許国に統合された。

これらの一つの奴国に皇産霊尊が入り統治し、後に、天忍穂耳尊の子で孫である瓊瓊杵尊を立て倭国の統治に踏み出した。先ずは、日向峠を越えた西側の隣国・伊都国と友好関係を結んだ。瓊瓊杵尊と木花之開耶姫との婚姻である。その後、倭国は奴国と伊都国を中心として発展し、建武中元二（57）年に奴国が代表して後漢へ使者を送った時、光武帝より金印を拝受した。この時、後漢はナイ国に奴国の文字を与え、倭国と併せて「委奴国」と刻んだ。同時に、後漢は奴を東夷の意として使い「倭奴」としたと考える。

更に後、安帝の永初元(107)年に倭国王帥升らが朝貢している。この頃から倭の三十国の間で争いが始まり、倭国を脱出する者が現れた。南部九州・東鯷国へ向かったのが彦火火出見尊であり、東部の大和へ向かったのが神武天皇である。倭国大乱は後漢霊帝の光和六(183)年頃まで続き、この大乱を収束させるために一女子・卑弥呼を共立し、女王が誕生した。『梁書』諸夷伝・倭の条に「**漢の霊帝の光和中に、倭国乱れ相攻伐し年を歴たので、一女子・卑弥呼を共立し王と為した**」とある。この女王・卑弥呼の宮殿が福岡平野の南部に造られた。そして、この宮殿のある福岡平野を、景初二(238)年六月に帯方郡役所へ行った難升米等は「邪馬壹国」と紹介した。これは〔邪馬ジャマ(シャモ)で壹番の国〕即ち、倭国のリーダー国であると報告したのである。このようにして、倭国は邪馬壹国をリーダーとした政治的同盟評議会国家となり、近畿政権もこれに倣い、纏向に宮殿を建て、政治的同盟評議会により運営された。

倭の五王
―『宋書』の倭國 ―
その３

名古屋市　　石田敬一

当会報誌の201号（平成29年5月号）、202号（同年6月号）では、それぞれ、第十四代仲哀、第十五代応神が九州の天皇である可能性を探りました。

書紀編者は、仲哀、応神は、近畿の天皇という立場で記述していますから、古代史の専門家も、書紀の思想に立って、仲哀、応神を近畿の天皇としています。それで、私たちも仲哀、応神は近畿の天皇に相違ないとして、九州の天皇であるかどうかについては、まともに検討してこなかったように思います。そこで、あらためて九州の天皇である可能性を検討した次第です。

さて、当会報誌202号で述べた応神については、神功皇后紀に筑紫の宇瀰で生まれたと記述され、また、皇居である大隅宮は、大隈村（現・福岡県糟屋郡粕屋町大隈）の方が島のような地形として近畿の通説より可能性が高く、さらに応神陵は、その地名から仲哀陵と同じ糸島半島の長野川流域に存在しており、かつ書紀に応神陵は「蓬莱丘」にあるとされておりイチゴの特産地である糸島は相応しいとしました。

以上のように、応神は筑紫に生まれ、筑紫に皇居を構え、筑紫で亡くなったと考えられることから、九州の天皇の可能性が高いとしました。

次に、第十六代仁徳天皇について、九州の天皇である可能性を探ります。

６　第十六代仁徳天皇
（１）仁徳の歌の「難波の崎」

仁徳は、『万葉集』では難波天皇と呼ばれ、大阪に居たとされる天皇ですが、博多の難波にいた天皇であるかもしれません。というのも博多にも難波があるのです。

『古事記』に仁徳天皇の有名な歌があります。

於是天皇 戀其黒日賣 欺大后曰「欲見淡道嶋而」 幸行之時 坐淡道嶋 遙望歌曰、『淤志弖流夜、那爾波能佐岐用、伊傳多知弖、和賀久邇美禮婆、阿波志摩、淤能碁呂志摩、阿遲摩佐能、志麻母美由、佐氣都志摩美由』乃自其嶋傳而幸行吉備國。

（岩波文庫『古事記』1963年、158頁）

ここに天皇、その黒日賣を恋いて、太后を欺き曰く「淡道島を見ようと欲う」と。幸行し時、淡道島に坐して、遙に望み歌ひて曰く、

「押し照るや　難波の崎よ　出で立ちて　我が國見れば　阿波志摩　淤能碁呂志摩　檳榔の島も見ゆ　放つ島見ゆ」

すなわちその島より傳ひて、吉備國に幸行す。　　（読み下しは泉城による）

難波の崎からわが国を見ると、淡島やおのごろ島、檳榔（ビロウ）の生えている島も見え、また、放つ島が見えると、仁徳は、我が國を見て感慨深げに歌っています。我が國は、淡島、おのごろ島、あじまさの島、放つ島が存在しているところです。

通説では、淡路島から大阪湾を眺め、その大阪湾の島々を我が国といい、さらにそれらの島を伝わって黒日賣のいる吉備國に行くのですが、２つの矛盾があります。

１つは、大阪湾には現在も古図にも島らしい島がありません。

２つめは、淡路島からみて大阪湾に浮かぶ島々は東にあって吉備國は西にありますから、東にある島々を伝わって吉備に行くのは方向が逆であり矛盾します。この歌の設定は黒日賣を恋い慕う歌となっていますが、実際は国見の歌であって、設定と歌の内容が一致していないことからこうした矛盾が生じていると思われますが、大阪湾の眺める歌としても歌の内容が合致しないようです。

さて、この歌には「難波の崎」が地名としてあらわれます。通説では、難波を大阪の摂津・難波とします。記紀編者は難波は大阪のことであるとして記述していますので、当然、難波の伝承があれば、それは摂津・難波であ

ると理解しています。したがって、難波に関する記事は、摂津・難波を前提とした記述になっていると私は思います。

ところが、こうした前提を除いて考えると難波は、摂津・難波だけではなく、博多・難波の可能性がうかがえます。とりわけ、歌の前後には、歌った際の状況が付されていますが、これはあとから付加された設定と思われますので、これらの設定を一旦白紙にして、歌が持つ意味で判断すると新たな状況が見えてきます。

博多は、交易の港であり、儺津（なのつ）・那津（なのつ）・儺大津（なのおおつ）などと呼ばれ、「な」の港です。また、当会報誌201号で示したとおり、仲哀の記事から「儺縣」は「筑紫」とほぼ同じ場所を指しており、筑紫の辺りに「な」があります。

この歌の難波は、博多の那津や博多の中心を流れる那珂川の名称「な」に起因する区域を指すのではないかと思われます。

「那爾波」は、博多の辺りの地名「那」と「爾波」から成っており「爾波」は「庭」のことと考えられ、古代日本では、「には」と言えば神事等を行う平らな場所です。平らな海も平らな平野も「には」ですので、「那爾波」は「那」の平坦なところ、博多湾の海と平野を指すと思われます。

次に、難波の崎に続いて「伊傳多知弖（いでたちて）」という言葉が出てきます。私は、はじめ、この語句を難波の崎から「出航して」という意味であると思い込んでいました。次の『学研全訳古語辞典』の③[*1]の意味です。ですから、海上から我が国を見て歌ったものだと思っていたのですが、「出で立つ」の意味には、「出発」のほかに「① 突き出てそびえ立つ」や「② 出ていってそこに立つ」という意味があります。

とすると、この「**難波の崎よ 出で立ちて 我（わ）が國見れば**」の記事は、難波の崎が「突き出てそびえ立つ」状態と、仁徳がその皇居である高津宮から「出ていってそこに立つ」という２つの意味を兼ねているのではと考えられます。つまり、突き出てそびえ立つ難波の崎のところに立って我が国を見ている状況ではないかと思います。

住吉神社（福岡市博多区住吉）の絵馬にある鎌倉時代の「博多古図」や、鎌倉から室町時代の博多を描いた「博多往古図」によれば、博多湾は、古くは入り江が現在よりも南の方へ広がっており、かつて荒津山と呼ばれた西公園の辺りは博多湾に突き出ていました。荒津の名があるとおり、ここは荒い波のたつ津です。難ずる波という文字の難波と荒津は、意味が類似した語句であり、この荒津山が難波の崎であると思われます。

（２）阿波志摩（あはしま）

最初に歌われる淡島は、原文では「阿波志摩（あはしま）」とあり、淡島に関連すると思われる淡島神社は、北部九州に限っても、北九州市門司区門司区の淡島神社、福津市宮司元町の奥之宮淡島神社、うきは市吉井町若宮の淡島神社、柳川市椿原町の淡島神社、福岡県田川郡川崎町安眞木の淡島神社、福岡市博多区諸岡の諸岡淡島神社、そして福岡市西区元岡の淡島神社など数多くあります。これらの淡島神社は、和歌山県和歌山市加太にある淡嶋神社が総本社とされ、そこから分霊されたもので、あちらこちらに数多くありますから、淡島神社の淡島が、「阿波志摩（あはしま）」を特定できるとは思えません。

---

*1　『学研全訳古語辞典』いでーた・つ　【出で立つ】

①突き出てそびえ立つ。

出典万葉集　三一九　「いでたてる富士の高嶺（たかね）は」　［訳］そびえ立っている富士の高い峰は。

② 出ていってそこに立つ。

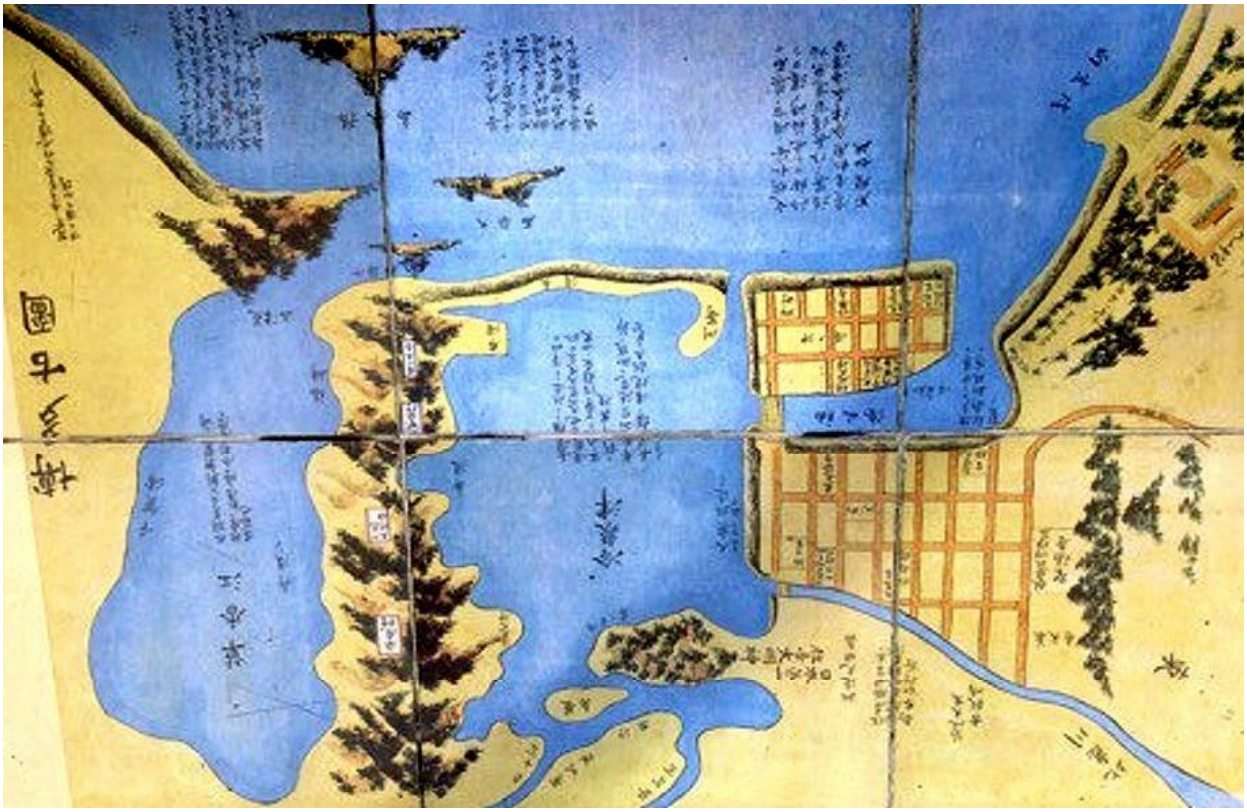
出典万葉集　四一三九「下照（したで）る道にいでたつ乙女（をとめ）」　［訳］⇒はるのその…。

③出発する。旅立つ。

出典万葉集　四三七三「大君の醜（しこ）の御楯（みたて）といでたつ我は」

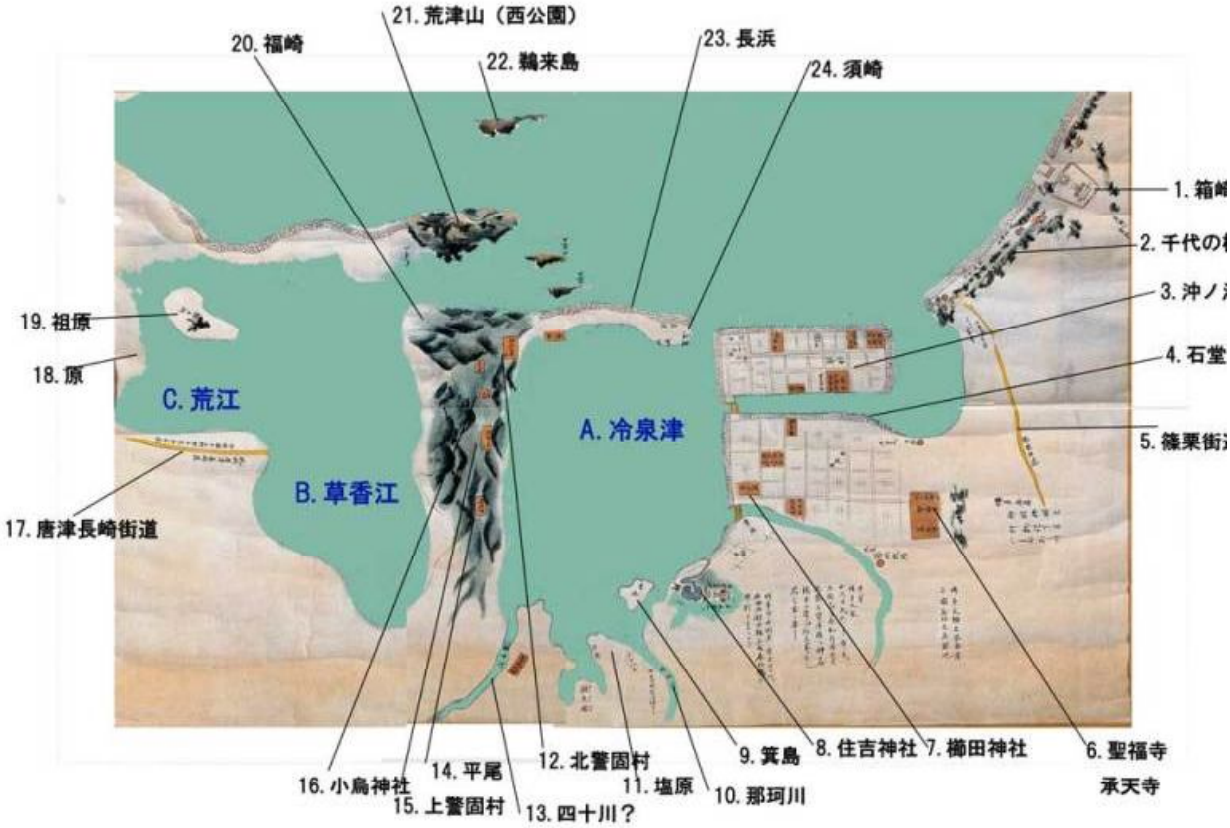
［訳］天皇の頑強な警護人とし　て出発するのだ、私は。　（以下省略）

＜鎌倉時代の博多古図＞　注・北が上になるように向きを変えています。



<江戸時代の博多往古図>の注釈図

http://ameblo.jp/kirey/entry-10682450338.htmlのHPから



原文と同じ「阿波」で示されているのは、書紀の「到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐此三字以音原而」（筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原）の「阿波岐」です。この「あわき」は書紀の神代上一書の「檍、此云阿波岐」の檍であり、檍とは、モチノキ科の常緑高木やシイ類の総称です。また、檍は「あおき」ともいい常緑樹の総称です。したがって檍とは、ほぼ常緑樹を表していると考えて良いでしょう。つまり「阿波」は、青々としているということです。「竺紫」にあって、緑の木々が生い茂った青い島が「阿波志摩」でしょう。

福岡市や糸島市など福岡県内の沿岸部や島嶼部においては、高木層はマテバシイが優占し，タブノキやヤブニッケイなどが混じり、亜高木層以下ではイヌビワ、ヤブツバキ、ハクサンボクなどが生育したマテバシイ群落となっています。マテバシイは古代より、薪炭、用材として利用され、果実は食用にされた貴重な樹木です。特に糸島半島では今でも灘山をはじめ各地にマテバシイの群落があり、胸高直径40cm程度の大木が生育しています。古くから、糸島は青々としたマテバシイ群落が広範囲にあったとされます。

現在の地名にも青木が残っています。今津湾の付け根にある小戸（福岡市西区）の西には、福岡市西区今宿青木の地名があり、まさしく「青木」とありますので、この辺りが「青木」と呼ばれていた名残でしょう。

また、小門（小戸）の地名の由来は、波で浸食され崩落してできた狭間とされます。旧志摩郡は、弥生時代にはこの小戸のある今津湾から船越湾に至る水道によって旧怡土郡から分離された状態であったとされますので、旧志摩郡の地形は島のような状態です。とすると、この糸島は、近くに「青木」の地名が残り、現在もマテバシイの群落等の常緑樹が生い茂り、まさに青い島ですから、糸島半島の旧志摩郡の辺りが「阿波志摩」ではないかと考えられます。

私は、この歌の淡島は、糸島半島の旧志摩郡、すなわち糸島であろうと思います。

（3）淤能碁呂島、檳榔の生えた島、放つ島

次に、「淤能碁呂島」は、先師古田武彦が『盗まれた神話』（ミネルヴァ書房、2010年）の第十三章の小見出し“「オノゴロ島」もつきとめる”において示された、博多湾内の能古島であろうと思います。

とすれば、「檳榔の生えた島」や「放つ島」も、阿波志摩や淤能碁呂島と同じように、「難波の崎」から見える博多湾か玄界灘の島でありましょう。

檳榔とはビロウの古名であり、ビロウは熱帯性のヤシ科の植物であり、九州と四国南部を含む東アジアの亜熱帯の海岸付近に自生し、北限は暖流の影響がある福岡県宗像市の沖ノ島で、小呂島には自生のビロウが確認されています。大阪や瀬戸内海の島には生育していません。ですから檳榔の生えた島は、大阪湾に無く、博多湾か玄界灘の島です。

とすると、はるか遠くにポツンと離れた島の意味と考えられる「放つ島」も、博多湾か玄界灘に浮かぶ島のようです。

（4）淡道島

ところで、鎌倉時代の博多古図では省略されてしまっていますが、江戸時代の博多往古図をみると、荒津山に繋がる東西に細長い「道」のような地形があります。歌の設定はあまり信用できませんが、設定にある「淡道島」について次のような理解が可能です。

島のように突き出た荒津山には、糸島である淡島の方から続く東西に細長い「道」のような地形が繋がっています。この淡島に向かう「道」と荒津山の両方を含めた全体を淡道島と呼んだのではないかと思います。もしそうであれば、歌の設定で「淡道島に坐して、遙に望けて歌ひて曰く」とする点と、歌の「難波の崎よ出で立ちて」が一見すると矛盾しているように思われますが、難波の崎が荒津山で、その荒津山を含む横長の地形を総称して淡道島であると想定できるので、これらは同じ場所を指しており矛盾しないとの理解が可能です。

（５）荒津山からの眺め

仁徳は、難波の崎に想定した荒津山、現在の西公園の岬から博多湾の方に向かって眺めます。西側展望広場からの視界は、北西の方に広がっています。

まず、真正面に能古島が見えます。

また、現在は、市営アパートで視界が遮ぎられていますが、アパートがない古代には、その能古島の左手に淡島に想定した糸島が見えるはずです。右手には志賀島、そして能古島と志賀島の間に三角に尖った玄界島が見え、その志賀島をかすめて小呂島がかすかに見えます。仁徳の国見の歌が、ここからの視界とすれば、向かって左側から順に、淡島は糸島で、オノゴロ島は能古島であり、檳榔（あじまさ）の生えた島は現在もビロウの自生が確認できる小呂島、そして放つ島は志賀島ということになるでしょう。

＜詠われた島々の位置図＞

玄界島では、ビロウが確認されていないようです。また、壱岐島と対馬は、この西公園からでは玄界島と糸島半島に隠れて見えません。また沖の島は遠方であるため見えません。したがって、この仁徳の国見の歌は、ここに立って読まれたとすると、たいへん視界の状況にマッチしています。

ところで、ビロウが小呂島に生えているのは、小呂島の七社神社にご神体として信奉するために人工的に植えられたからではないかと想像しています。

（６）神武東征の「難波の碕」

神武東征の『古事記』の記事に「難波の碕」があります。

神武東征の通説のコースは、宮崎（又は鹿児島、以下略）の日向（ひゅうが）を出発し筑紫へ向かいます。豊国の宇沙、岡田宮に行き、さらに阿岐国の多祁理宮、吉備国の高島宮、そして、「難波の碕」で大潮に合い、浪速国の白肩津で長髄彦との戦いに負けます。このときの言い分けが東を向いての戦いは良くないので、西を向いて戦うとして大きく南へ回り込み熊野から吉野を経て大和に至るというものです。

このコースについて多くの人が疑問に思っていることは、書紀では「**東有美地**」と老翁に聞き「**天皇親帥諸皇子舟師東征**」として東へ行くといいながら、通説では、宮崎の日向から九州の東海岸を北の方角に行き、さらには宇沙から岡田宮へと西方へ逆に戻ってしまいます。

これで「東征」といえるのでしょうか。どこかで錯綜しているようです。

それから、もう一つ気になる点は、東征の途中で数年の期間を費やした安芸や播磨において、戦闘、又は歓迎行事などがあったと思われますが、それらはすべてカットしていながら、なぜ、難波で負ける話のみは詳細に記述したのでしょうか。「**背負日神之威**」と宣言しているのですから、安芸や播磨と同じように難波での戦いはカットし、日を背にして西に向いて戦うところから記せば事足りるように思われます。

神武が日向・宮崎から出発し博多・難波に進行して負けた話と、筑紫から安芸、吉備を経て摂津・難波に進行する話の２つの伝承について、記紀編者は混乱して記述しているのではないかと思います。いずれにしても、難波の伝承については、摂津・難波を前提とした記述になっています。

ところが、難波は、摂津・難波が絶対とする考え方にどこか落とし穴があるような気が

してなりません。こうした前提を除いて、博多・難波を考える必要があろうかと思います。

（7）浪花

戊午年春二月丁酉朔丁未、皇師遂東、舳艫相接。方到難波之碕、會有奔潮太急。因以名爲浪速國、亦曰浪花、今謂難波訛也。

三月丁卯朔丙子、遡流而上、徑至河内國草香邑青雲白肩之津。（神武紀）

（神武天皇即位前紀）戊午年春二月丁酉朔丁未に皇師遂に東にいく。舳路を相接げり。方に難波之碕に到るときに、奔き潮有りて太だ急に會う。因て、名けて浪速国とす。亦は浪花と曰う。今、難波と謂うは訛なり。

三月丁卯朔丙子、上流へ流れを遡り、徑に河内國の草香邑青雲白肩之津に至る。

この記事において注目したい語句として「浪花」があります。

「難波」は訛りであり、本来は「浪速」や「浪花」とされます。

難ずる波の意味の「難波」は、浪が速い「浪速」と類似の状況を表現した語句です。

では「浪花」はどのような関連があるでしょうか。

私は、「浪花」は字のごとく、いわゆる「波の花」ではないかと思います。「波の花」は、冬の能登の風物詩として有名で、プランクトンが多い日本海側の海岸において冬の荒波により花のように白い泡が生じる現象です。もし、「浪花」が「波の花」のことであるとするならば、「波の花」は荒波によるものですから、「難波」や「浪速」と類似の状況を表現した語句が使われていると理解できます。

ところが「波の花」は限られた地域でしか観られません。九州では、冬の志賀島で観られることが知られています。

大阪の摂津・難波では「波の花」が観られませんから、「浪花」が「波の花」であるとするならば、この「難波」は少なくとも摂津ではないことが明白となります。

地名説話では、難波は浪速であり浪花ですが、先に示したとおり、難波の中心は「那の庭」である博多湾です。そして、この記事の「河内國の草香邑」は、博多古図の草香江における邑と思われますから、まさしく河内の中にあるということになるでしょう。

草香江の西方には、野河内渓谷（福岡市早良区）があり、博多の中心地には柳河内（福岡市南区）があり、これらは「河内」の地名の名残と思われます。那珂川を上流に上った福岡県那珂川町には、かつて「河内郷」がありました。五ヶ山ダム建設により離散した「桑の河内郷」であり「桑河内の滝」の名所として、また、現在は五ヶ山の東の佐賀県鳥栖市に河内町として名が残っています。

（8）仁徳の皇居

仁徳の皇居については、書紀に「都難波、是謂高津宮」とあります。通説では、これを大阪市中央区高津にある浪速高津宮（高津神社）とされます。摂津・難波には、高津宮址の石碑（大阪府立高津高校内）がありますが、明治三十二年（1899）の仁徳1500年祭を行った際に立てられた近代のものです。また浪速高津宮も貞観八年（866年）に旧都の遺跡を探索して社地を定めたものであって、後代によるものです。したがって、摂津・難波に高津宮があるとする決め手はないようです。

これに対して、九州北部には「高津宮」があります。

博多湾から那珂川をさかのぼった那珂川町には、この「高津宮」と同名の神社「高津神社」（福岡県筑紫郡那珂川町山田359-3）があります。神功皇后の「裂田の溝」の600m程南にある小高い位置にあり、そのご祭神は、次のとおりです。

- 高津正一位稲荷　豊宇気毘売神（山田区伏見神社本宮から頓宮される）
- 原田種直　岩戸城主（龍神山）
- 高津権現　原田家の守り神（糸島郡前原町八幡神社の熊野権現様から分配された）

ご祭神のうち、原田種直は、平安から鎌倉時代の武将で岩戸城主であり、高津権現は、

糸島郡前原町八幡神社の熊野権現から分配されたといい、原田家の守り神が高津権現です。

また、ご祭神となる高津正一位稲荷・豊宇気毘売神は、一般的に神功皇后の姉(又は妹)である淀姫命で「津波の神格化」がなされたものといわれ、福岡県那珂川町山田の伏見神社本宮から頓宮され、この本宮では淀姫命が祀られています。

この伏見神社本宮は「岩戸神楽」の舞台として有名で荒神の鬼が子供をさらう舞は、津波が子供をさらうことを表現しているようです。また、拝殿にはたくさんのナマズの絵馬が奉納されています。このナマズは地震前兆の電磁波に敏感で異常行動を起こすといわれており、地震のすぐあとに起こる津波と関連しています。この神様が「白ナマズ」ということでしょう。

淀姫命が御祭神となっているのは、標高20mのこの伏見神社本宮のあたりまで津波が押し寄せたためと考えられるとともに、高津神社が伏見神社本宮から移動して高台に位置している理由と思われます。すると「那爾波」に「難波」の文字が充てられ「難をもたらす波」とされたように、「高津」は「高い津波」を意味することから、これらの地名の繋がりがよく理解できるように思います。

博多の筑前國一之宮の住吉神社（福岡市博多区住吉）は、下関の住吉神社や摂津の住吉大社よりも早い創建とされており、さらにそれらの全国の住吉神社の元宮といわれる、現人神社（福岡県筑紫郡那珂川町仲）は、住吉三神本津宮と呼ばれ、この高津神社や伏見神社本宮のすぐ北、那珂川沿いに２kmほど下ったところにあります。

さらにこの那珂川を下ったところに、若宮八幡宮（福岡市南区三宅2-23-2）があります。三宅小学校に隣接したこの宮は、現在の博多港である儺の津にあった「筑紫の官家跡」との伝承があり、これが事実であるとすれば、古き博多では福岡市南区まで海であったことになり、現在の海岸線よりずいぶんと入り江が南に入り込んでいたようです。博多の住吉神社所蔵の鎌倉時代のころを表した博多古図でも入り江が南の方へ食い込んでいる状況がうかがえます。

そして、この若宮八幡宮の御祭神が、大雀（おおささ）命（仁徳天皇）です。さらに下った那珂川沿いに博多・河内の住吉神社があり、ここが仁徳天皇が開いたとされる住吉津でしょう。この博多・難波に住吉津があったと考えられ、仁徳は博多・難波と強い関連性があるのです。仁徳に関連する史跡は、この那珂川沿いに連なっているようです。

（９）堀江と茨田堤

仁徳紀十一年に「冬十月、掘宮北之郊原、引南水以入西海。因以號其水曰堀江。又将防北河之澇、以気築茨田堤」とあります。

この記事は、宮の北の平原を掘り南水を引いて西海に入るようにした「堀江」と、北の河の大波を防ぐために「茨田堤」を築造したことを表しているでしょう。

摂津・難波には、関連する地名があり、難波の「堀江」や「茨田堤」を特定していますが、博多・難波にも難波の「堀江」や「茨田堤」を想起させる地名が残っています。

この記事の仁徳の宮が、先に示したとおり高津神社（福岡県筑紫郡那珂川町山田）や伏見神社本宮とすれば、そのすぐ北には柏原（福岡市南区柏原）や桧原、尾形原さらには、梶原（那珂川町上梶原）など「原」の名が付く平原の地名が広がっています。これらが、「宮北之郊原」にあたるでしょう。それらの西北に連続して片江(城南区片江)始め南片江や西片江の地名があり、これは難波の「堀江」を想起させます。

また、これらの東に隣接して堤（城南区堤）や堤団地（城南区堤団地）の地名があり、「茨田堤」を指しているように思います。

茨田堤を築造した後、「茨田屯倉」が立てられたとありますが、この「みやけ」も福岡市南区「三宅」として地名が残っています。

那珂川周辺の限られた地域に、「宮北之郊原」「堀江」「茨田堤」「茨田屯倉」を想起させる地名がそれぞれ残っています。

那珂川の西にほぼ並行して樋井川が流れています。

樋井川は、福岡市内を流れる二級河川であり、本川は、南の方から北西方向に柏原や桧原の中央を貫ぬき流下しています。現在は福岡市城南区友丘で本川と支川に分かれ、２km ほど流下すると草香江です。友丘から南方へ分かれた支川は途中から南西方向に分かれ福岡大学の方に向かい、また南方に向かう支川は堤団地に向かっています。現在の樋井川は南東部から北西部に流下していますが、当時の草香江は現在よりもっと南の方まで入り江があったと思われますので、「引南水以入西海」に示されるように樋井川は西に広がる草香江に流れ込んでいたと思われます。

この樋井川が排水を良くするための「難波の堀江」の一部だった可能性があります。

樋井川の「樋」とは、雨水等を集め運ぶ装置や設備のことをいい、「樋」は地上に仮設して水を流す筒状のもので、「樋」とは堤などから排水するための門のことであり、また、「井」は、井戸の他に湧き水や川の流水を汲み取る所の意味があり、「樋井」の名称は、川の流水を集めて運ぶ人工物を想起させ、まさに「堀江」の築造と合致します。樋井川の水は日常的には農業用に使われていたようです。

また、樋井川は、堤や堤団地を流れており、この地には、伏見神社本宮（那珂川町山田）の「白ナマズ」に象徴されるように大波を防ぐための堤が築かれていたと考えられます。

（１０）仁徳の名

仁徳の名は『古事記』では大雀命、『日本書紀』では大鷦鷯尊とされ、この「鷦鷯」は、ミソサザイの古名です。ミソサザイは全身こげ茶色で雀より小さい小鳥です。ただ、俊敏な動きや、大きくはっきりしたきれいな鳴き声、また胸を張った堂々と鳴く姿勢が、俊敏さと聡明さを表現しているのかもしれません。さらに、仁徳は「大鷦鷯」で「大」のミソサ

ザイですから、よりその姿が立派だったということでしょうか。

応神の子と武内宿禰の子は、同じ日に生まれ、それぞれの産屋に飛び込んできた鳥の名前を交換し、仁徳には大鷦鷯（大雀）、武内の子は、ミミズク・フクロウを意味する木菟宿禰（平群氏の祖）と名付けられたといいます。天皇の子と臣下の子の名前の交換そのものが奇妙な話ですが、これは表向きのことで、本来は体ごと入れ替わったことを暗示しているように思われます。つまり、武内宿禰の子が皇位についたことを言わんとしているのではないでしょうか。

（１１）鳥にまつわる話

仁徳の御陵については、『古事記』では、「毛受之耳原」、書紀では「百舌鳥野陵」であり、記紀に共通する仁徳の御陵の地名は、モズです。

仁徳の名も陸墓も鳥に関わり、また、仁徳の弟である速總別王も鳥にかかわる名です。

いずれにしても、なぜ、仁徳には、これだけ鳥にまつわる話が多いのでしょう。仁徳の名が大鷦鷯（大雀）という鳥にからむからでしょうか。しかし、それだけでは理解できません。というのも、同じく鷦鷯の名を持つ小泊瀬稚鷦鷯尊（若雀命）の武烈紀には、鳥にまつわる話はありません。

やはり、応神紀に、鳥にまつわる話が多いのは異常といえます。

さらに、仁徳紀には、鳥に関する特異な記事があります。

卌三年秋九月庚子朔、依網屯倉阿弭古、捕異鳥、獻於天皇曰「臣、毎張網捕鳥、未曾得是鳥之類。故奇而獻之。」天皇召酒君、示鳥曰「是何鳥矣。」酒君對言「此鳥之類、多在百濟。得馴而能從人、亦捷飛之掠諸鳥。百濟俗號此鳥曰倶知。」是今時鷹也。乃授酒君令養馴、未幾時而得馴。酒君則、以韋緡著其足、以小鈴著其尾、居腕上、獻于天皇。是日、幸百舌鳥野而遊獵。時雌雉多起、乃放鷹令捕、忽獲數十雉。是月、甫定鷹甘部、故時人號其養鷹之處、曰鷹甘邑也。

依網屯倉の阿弭古がこれまで見たことがない珍しい鳥を献上したが、百済ではこの類の鳥はよく観られる狩猟に使う倶知と呼ぶ鷹のことであり、天皇は鷹を飼い馴らし百舌鳥野で雉を獲り遊んだという内容です。

この記事で、まず注意すべきことは、依網屯倉の阿弭古です。

依網屯倉については、皇極元年（642年）に河内国の依網屯倉の前で翹岐等を召して射猟を観覧させたとの記事があり、依網屯倉には猟場があったことがわかります。そして依網とは、古代博多のように川波と海波の相寄せるところを意味します。

また、依網の阿弭古は、依網吾彦男垂見と思われ、この依網吾彦男垂見は、神功皇后から命を受け福岡市博多区住吉の住吉神社を創祀した人物です。

となると、この依網屯倉は、通説の大阪市住吉区庭井町にある大依羅神社ではなく、博多にあったと考えられます。また、ここに猟場もあったのではないかと思われます。

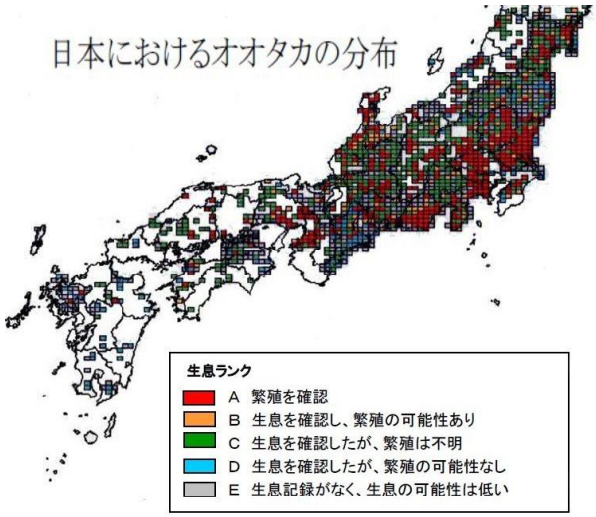
次に注目すべきは、鷹狩に使われる鷹の種類です。

鷹狩に使われる鷹の種類は、タカ科のイヌワシ、オオタカ、ハイタカ、およびハヤブサ科のハヤブサです。ここで話題とされる鷹の種類を考える場合、まず除外されるのは速總です。珍しい鳥を献上した説話からすると、ハヤブサは仁徳の弟の名で既知の鷹であるはずですから対象外です。知らない鳥の名が弟の名であることはありえません。またハイタカは、本州以北に留鳥として分布し、秋の渡りでは朝鮮半島方面から九州にいて、春の渡りでは日本列島から朝鮮半島方面に移動します。知らない鳥とはいえないでしょう。

となると、考えられるのは、オオタカかイヌワシのどちらかですが、いずれも生息分布によれば一目瞭然です。

オオタカ、イヌワシはいずれも、近畿以東に繁殖・生息が数多く確認されていますが、福岡県においてはいずれも繁殖は確認されていません。九州全体においても、オオタカやイヌワシの繁殖や生息の状況は少ないといえ

ます。次のオオタカの生息分布図は、環境省の調査に基づくものであり、現時点の繁殖・生息状況ではあるものの、客観的で大いに参考になる資料です。福岡は空白であり九州全体でも分布が少ないといえます。



※メッシュがないところは、生息情報が得られなかったところ

したがって、仁徳紀の鷹狩の記事にある鷹がオオタカやイヌワシであるとすれば、これまで見たことがない珍しい鳥といえそうな場所は、博多でしょう。とりわけ、オオタカであるとすれば、近畿では大阪府を取り囲むように繁殖していますから摂津の話では無いことが明確であると思います。

韓国の鷹狩りは、ユネスコ無形文化遺産に登録されています。それを紹介するビデオで使われている鷹はオオタカの成鳥と幼鳥です。したがって、仁徳紀の鷹狩りの記事で、百済において「倶知と呼ぶ鷹」は、オオタカと考えられます。

このオオタカは、1993年の時点では本州、四国での繁殖が確認されている一方で、九州では繁殖が確認されていませんでしたので、この点から九州ではオオタカは珍しい鳥であり、仁徳紀の鷹場の場所は、九州・博多の可能性が高いことを支持していると思います。

さて、先に示したとおり、仁徳の御陵の地名は、書紀に百舌鳥野とあり、御陵と鷹狩りの場は、同じ百舌鳥野です。

仁徳の名は、サザキの鳥の名でありながら、御陵の地名をわざわざモズと名付けたことに、大いに不自然さを感じますが、河内の石津原に陵を定めた時に、鹿の耳から現れた百舌鳥に因んだという地名起源説話によるものです。これは、記紀編者に、天皇の御陵は摂津にあると考えていた認識があって、そのうえで仁徳陵の比定地の地名が「百舌鳥野」であることから、その「百舌鳥野」の地名に繋がるように作られた話であると思われます。つまり、摂津・難波の「百舌鳥野」の地名を想定して記紀は記されているのではないでしょうか。

ここでは、御陵と鷹場が同じ場所にある点に留意したいと思います。

（１２）仁徳の御陵

通説では、16代仁徳、17代履中、18代反正の御陵は、「毛受野（もずの）」や「百舌鳥野」にあるとされ、通説では、仁徳、履中、反正の御陵は大阪府堺市の百舌鳥野において、それぞれ大仙陵古墳（大阪府堺市堺区大仙町）、ニサンザイ古墳、田出井山古墳に治定されています。これらの古墳は、「百舌鳥野」の地名があるところにある古墳ですから、仁徳陵などの治定は揺るがないものとされます。

ところが、面白いことがあるのです。

『仁徳陵』（中井正弘著、創元社、1992年）によれば、『全堺詳志』（高志芝巌・養浩著、宝暦七（1757）年）の「仁徳帝陵」の項に「**御廟は北峰にあり。石の唐櫃あり。石の蓋長さ一丈五寸、幅五尺五寸、厚凡八寸」、「内には尊骸幷に明器等あるに非ず。空櫃なり。千四五百年を歴たるなれば盗賊の発たるならん。**」とあり、北峰の後円部に石室石棺があったと確認できます。また、明治５（1872）年には、災害の土砂崩れにより、前方部に石室石棺が発見されています。石室内には甲冑や鉄刀があると記録され、石棺は開けずに埋め戻されたとのことです。

つまり、このことから、前方部にも石室があったと確認できます。

ということは、大仙陵古墳には、後円部と前方部のそれぞれに、石室・石棺があるとい

うことになります。

となると、仁徳の御陵には、合葬や追葬の記事はありませんので、この大仙陵古墳は、仁徳陵とは考えにくいことになり、それぞれの石棺は一体誰のものとなるのか不詳です。

もし、これが仁徳陵であるとすれば、共に葬られているはずと考えられる正妃の磐之媛は、山城の筒城宮（通説：京都府京田辺市）の地に没したとされますし、また、浮気相手で後の皇后の八田皇女は、ウワナベ古墳（奈良県奈良市法華寺町）に葬られたと想定されておりマッチしません。

さらに面白いことに、『全堺詳志』に、もともと仁徳陵は、現・天王寺公園内の茶磨山（大阪市天王寺区茶臼山町1-108）に築かれ、崩御後に、故あって百舌鳥野に葬ったという伝承を紹介しています。そのような変更がされた理由は不明です。

また、仁徳陵に治定する大仙山古墳が、履中陵に治定するミサンザイ古墳より築造時期が新しいなどの築造順序の問題や仁徳の大仙山古墳と反正の田出井山古墳の大きさに差がありすぎるなどの疑義があって、摂津の仁徳陵の比定には様々な問題が残ります。

肝心なことは、書紀に「**獻于天皇。是日、幸百舌鳥野而遊獵**」とあるように、皇居の近隣に鷹狩りの場があることでしょう。皇居で献上された鷹を献上されたその日にその鷹を使って鷹狩りを楽しんだことになりますから、皇居のすぐそばに鷹場があり、陵も同じ地名ですので、陵も皇居に近い場所にあると考えられます。要するに皇居、陵、鷹場は、近隣にあるということです。

摂津・難波では、皇居は、難波高津宮（大阪府大阪市中央区）で、御陵は、大仙陵古墳（大阪府堺市堺区大仙町）であり比較的近いところにありますが、先に示したとおり、摂津では、オオタカは珍しい鳥ではなかったと思われ、仁徳紀の鷹狩りの記事内容には合致しないようです。

これに対して博多・難波では、那珂川沿いにある高津宮の本宮、福岡県那珂川町山田の伏見神社を皇居とすれば、同じく那珂川沿いにあって近接している福岡市の博多区や南区には興味深い古墳があります。

福岡市博多区那珂一丁目にある那珂八幡古墳は、４世紀初頭の築造と考えられ全長85ｍあり博多では最大規模です。その少し南の福岡市南区には、すでに消滅したものの４世紀中葉築造の全長75ｍ程度の卯内尺古墳（うないじゃくこふん）があり、近接して、４世紀末頃築造で全長76m程度の老司古墳があります。さらに博多区には全長70ｍ程度で、４世紀末から５世紀初頭の博多１号墳があります。これらは、仁徳を始め、履中、反正の御陵に想定してよさそうな時期に築造され、かつ、せまい区域に集中しています。古墳の規模においては摂津のそれには適いませんが、倭の五王として戦闘を続ける王者の御陵としては充分に大きな古墳といえましょう。摂津の古墳は、戦闘とは関わりが少ない平和な時期や戦闘のない地域において築造された古墳であって、それらは近畿の有力者の墳墓ではないかと思われます。

那珂八幡古墳は、帆立貝形古墳で円部に２基の埋葬があります。社殿の真下にある１号主体部は大部分の規模・副葬品は不詳ですが、北側の２号主体部は石槨を造らず墳丘に直接埋葬した直葬形式であって、長さ2.3mの小さな割竹形木棺であることから後世に追葬されたと思われます。２号主体の副葬品としては、棺内から三角縁神獣鏡と勾玉・管玉・ガラス製小玉が出土しています。

この古墳は、福岡平野の中央に位置し、御笠川と那珂川に挟まれ、当時は大きな入り江であったと推定されることから、半島状にせり出した丘陵の上に、この古墳は位置していたと考えられ、まさに先に示した、川波と海波の相寄せる「依網（よさみ）」に相応しい位置にあるでしょう。この１号主体が仁徳の陵に該当するのではないかと思います。

那珂八幡古墳の上に建つ那珂八幡神社の祭神は、応神、神功皇后、玉依姫の三神ですが、西側参道の鳥居の扁額には「武内大神」とあり、名前交換の説話からして、意味ありげです。

老司古墳は、竪穴式石室に横からの入口を

取り付けた「竪穴系横口式石室」であり、「竪穴式石室から横穴式石室」に大きく変わる過渡期の古墳で、追葬を可能とする構造であるところが特徴です。方部に１基、円部に３基の埋葬があり、銅鏡10面、管玉や勾玉、鉄製の武器や農具、馬具、甲冑など王者に相応しい副葬品が出土しています。

追葬を考慮した**那珂八幡古墳から**老司古墳へ**の**石室の構造の変化は、まさしく個々に古墳を築造するには、人的や時間的に余裕が無くなり、追葬の必要性が増したからであると思われます。

日本最古の横穴式石室を持つ古墳は、福岡の鋤崎古墳であり、この石室構造の変化は、博多から始まり、それに追従して畿内に広がっているところに注目すれば、博多・難波が埋葬文化の発祥であり、ここを起点にして古墳が全国に広がったことを物語っており、古墳の発祥について再検討が必要では無いかと思います。

いずれにしても、仁徳陵は、筑紫にあった可能性が高いと言え、総合して仁徳は九州の天皇であったということになるでしょう。

ひ ろ ば

文献図書の寄贈

古田史学の会・仙台の阿部勇雄氏から、その著書“「古事記・日本書紀」の実年代”（平成29年2月、自悠工房）が寄贈されました。

前回の例会の内容

■ 持統天皇の行幸

一宮市　畑田寿一

持統の行幸を通じ当時の状況について考察した。

■ 九州古代史探訪旅行　その７

安城市　山田　裕

神社考古学の観点を含め、日隅宮、継体天皇の墓陵、大率・姫氏について述べた。九州古代史探訪旅行の最終章である。

■ 『会津正統記』と古代逸年号

瀬戸市　林　伸禧

『会津正統記』に掲載されている古代逸年号について、関連文献を精査した。

■ 倭の五王　その２

名古屋市　石田敬一

倭の五王に関連して、記紀に記される天皇は、九州王朝の天皇であるという視点に欠けていたことを踏まえ、倭の五王の前段として、応神天皇が九州王朝の天皇である可能性を検証した。

■ 筑紫の日向

名古屋市　石田敬一

筑紫の日向について古田説を提示・紹介した。

例会の予定など

■ 今月の例会

(1) 日 時　７月１６日(日) 13:30～17:00
(2) 場 所
　名古屋市市政資料館 第５集会室
　名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
(3) 参加料　500円　（会員は不要）
(4) 交通機関
・地下鉄名城線「市役所」、東徒歩８分
・名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩５分
・市バス「市政資料館南」、北徒歩５分
・市バス「清水口」、南西徒歩８分
・市バス「市役所」、東徒歩８分
(5) 駐車場 市政資料館：12台＋α収容(無料)

■ サマーセミナーについて

(1) 日時　７月17日(祝)
　13：10～14：30　（講座K179）
　14：50～16：10　（講座L168）
(2) 場所　同朋大学 博聞館
　1F H102（普通教室）

地下鉄東山線「中村公園」で下車。6番出口外にあるバス停より、市バス中村13号系統「稲西車庫」行に乗車。「鴨付町」にて下車すぐ（名古屋駅からの所要時間約13分）です。

■ 来月以降の例会　８月13日(日)，９月17日(日)

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。例会で発表する際は資料を**25部**用意ください。

■ 投稿締切り日　７月３０日(日)

・全て11ポイントでべた打ちしてください。
・インデントは使わないでください。
・引用文は、これまでの会報誌の例を参考に、出典・頁数を示し正確に文字を転写のこと。

■ 投稿先
furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp